

# おむすび

八

特集「山形ビエンナーレ2020」に向けて

「地域の企業」と「芸工大」をむすぶ



連載：山形の元気！卒業生の仕事② そして、彼女はマタギになった…  
蛸原紘子さん [マタギ/小国町役場職員]

## 後援会会員

231社(2019年12月1日現在)五十音順

- (株)アートエッジ
- あいおいニッセイ同和損害保険(株)
- 税理士法人あさひ会計
- (株)朝日測量設計事務所
- (株)アサヒマーケティング
- (株)あじまん
- 東の麓酒造(有)
- (株)AZOTH
- (株)荒正
- (株)いそのボデー
- (株)市村工務店
- (株)井筒屋
- (株)IBUKI
- 羽陽建設(株)
- うるしやまタクシー(株)
- (株)ウノハウス
- (株)エイアンドシー
- SMB C日興証券(株)山形支店
- (株)エスパック
- (株)エフエム山形
- (株)エム・エス・アイ
- (株)エル・サン
- (株)エルティリゾートやまがた
- 遠藤商事(株)
- (株)オーイン
- (株)大風印刷
- (株)大久保硝子店
- 太田産商(株)
- 大沼
- オオホリ建設(株)
- オオカムラ
- (株)小川製麺所
- 奥村恵一郎行政書士事務所
- (株)奥山商店
- 小野建設(株)
- オビスン(株)
- オリエンタルカーペット(株)
- (有)鏡豊店
- (株)カスカワスポーツ
- 月山観光開発(株)
- (株)加藤物産
- (株)金入
- (株)上山温泉ホテルあづま屋
- (株)カルラ
- 技研(株)
- (株)杵屋本店
- (株)きらやか銀行
- (株)きんでん東北支社
- (株)タリエイティヴスタッフ
- 黒澤建設工業(株)
- (株)建装テクノ
- 弘栄設備工業(株)
- (株)蔵王サブライズ
- (株)蔵王ミート
- 酒井造園
- (株)栄屋ホテル
- (株)ささき(ブライダルハウスささき)
- (株)佐藤松兵衛商店
- (株)サニックス
- (株)山形サンシャイン大森
- (株)I S コーポレーション東北支社
- (株)JTB 山形支店
- (株)JES設計
- (株)Jエンター
- (株)志録園
- (株)四山楼
- (株)ジョイン
- (株)荘内銀行
- (株)松柏会 至誠堂総合病院
- (株)尚美堂
- 進和ラベル印刷(株)
- (株)鈴木製作所
- (株)須田医院
- (株)須藤電機
- (医)清水会
- セコム(株)山形統轄支社
- (株)セゾンファクトリー
- (株)セロン東北
- 全国農業協同組合連合会 山形県本部
- (株)そめこや本店
- (株)大商金山牧場
- (株)ダイバーシティメディア
- 大和証券(株)山形支店
- ダイボウ情報システム(株)山形支店
- 高橋一夫公認会計士事務所
- 高橋型精
- (株)高橋畜産食肉(株)
- 高橋フルトゥランド
- (株)永井設計
- (株)タカハタ電子
- (株)タキザワ
- (株)滝の湯ホテル
- (株)竹原屋本店
- (株)多田農園
- (株)田中工務店
- (株)タマツ
- 田宮印刷(株)
- (株)丹野
- (株)丹野園茶舗
- (株)丹野こんにゃく
- (株)千歳館
- (株)千歳建設
- (株)サニックス
- (株)千歳不動産(株)
- (株)千代田商社
- (株)千代田商社
- (株)千代田商社
- (株)塚田会計事務所
- (株)つたや
- (株)ツルヤ商店
- (株)テトラス
- (株)デンソーFA山形
- (株)天童ホテル
- (株)天童木工
- (株)でん六
- 東栄コンクリート工業(株)
- 東京海上日動火災保険(株)山形支店
- (株)東北環境総合サービス
- 東北電化工業(株)
- 東北電力(株)
- 東北バイオニア(株)
- (株)東北ハム
- トイエ工業(株)
- (株)富岡本店
- (株)とみひろ
- トヨタカローラ山形(株)
- (株)トヨタレンタリース山形
- 内外緑化(株)
- (株)トウエール
- (株)水井設計
- (株)長門屋
- ナブコシステム(株)山形支店
- 西東北日野自動車(株)
- (株)にしむら
- 日東ベスト(株)
- 日本地下水開発(株)
- (株)ニューテックシンセイ
- 沼澤歯科医院
- ネットヨタ山形(株)
- ネットワークの里
- 野川商事(株)
- 野口鉄油(株)
- 野村證券(株)山形支店
- (株)ハイスタッフ
- (株)ハイテックシステム
- (株)羽田設計事務所
- (株)日本語屋
- 東日本電信電話(株)山形支店
- ファースト興産(株)
- (株)フアイン
- 藤庄印刷(株)
- 富士ゼロックス(株)
- フジテック(株)東北支店
- 布施弥七染店
- 平成タクシー(株)
- (株)ベガスベガス
- (株)保志
- (株)ホンカワ
- (株)ホテル月の池
- (株)本間利雄設計事務所
- (株)丸十大屋
- (株)マルゼン山形営業所
- 丸善雄松堂(株)仙台支店
- (株)丸俊
- ミクロン精密(株)
- MISAWA SHOE DESIGN(株)
- みずほ銀行山形支店
- 三井住友海上火災保険(株)
- 三井住友火災保険(株)
- マイク美創(株)
- (株)名月荘
- (株)メアス 東北事業部山形支店
- (株)モス山形
- (株)モンテディオ山形
- (株)ヤガイ
- (株)矢口
- 八千代交通(株)
- (株)山形アドベニール
- 山形いすゞ自動車(株)
- 農事組合法人山形おきたま産直センター
- 山形ガス(株)
- 山形銀行
- 山形空港ビル(株)
- (株)山形ランドホテル
- (株)山形県観光物産会館
- 山形県行政書士会
- 山形県自動車販売店リサイクルセンター
- (株)ハイスタッフ
- 山形建設(株)
- 公益社団法人山形県宅地建物取引業協会
- 山形県民共済生活協同組合
- 公益社団法人山形交響楽協会
- (株)カキザキ 山形国際ホテル
- 山形酸素(株)
- 山形市農業協同組合
- (株)山形商美社
- 山形食品(株)
- (株)山形新聞社
- 山形信用金庫
- 山形ゼロックス(株)
- 山形第一不動産
- (株)山形テレビ
- 山形トヨタ自動車(株)
- 山形農業協同組合
- 山形バナソニック(株)
- (株)山形ビニール商会
- (株)山形ビルサービス
- (株)山形部品
- 山形放送(株)
- (株)山形丸魚
- 山形陸運(株)
- 山形ワンテンホテル(株)
- (株)ヤマコ
- (株)ヤマコン
- (株)ヤマザワ
- 山新観光(株)
- (株)山新広告社
- (株)山田鶏卵
- 山本組
- 悠湯の郷ゆき
- (株)吉田段ボール
- 恵楚画廊
- (株)蘭企画
- リコージャパン(株)山形支社
- 両羽協和(株)
- 菱機工業(株) 仙台支店
- (株)旅館古堂
- リンベル(株)
- (株)レンタルプラザ
- 和田酒造(有)
- 渡辺包装(株)



本誌HPに掲載すべき情報、ご意見・ご感想をお寄せください。今後とも温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。  
icenter@agatuad.ac.jp

おむすび8号 2019年12月24日発行 発行：東北芸術工科大学後援会 〒990-9530 山形市上桜田3-4-5 TEL: 023-627-2194 WEB: http://kouenkai.tuad.ac.jp/ Mail: kouenkai@agatuad.ac.jp 印刷：田宮印刷株式会社



東北芸術工科大学 後援会

ディレクション：小林康(株式会社フロッツ/2006年現グラフィックデザイン学科卒業) / デザイン：土澤潮(デザイン事務所ペイジ/2004年現グラフィックデザイン学科卒業) 写真：表紙・連載=大沼洋美(0)(2005年現映像学科卒業)、特集=株式会社JPD(J)・根岸功(N)(2004年現映像学科卒業) / 編集：遠藤牧人(TUAD)

# 「山形ビエンナーレ2020」に向けて

2014年に隔年開催で始まった本学主催の芸術祭「山形ビエンナーレ」は、来年2020年9月の開催で4回目を迎えます。今回は芸術監督（就任予定）に東京大学医学部附属病院助教 医学博士の稲葉俊郎さんをお迎えし、山形にある芸工大ならではのコンセプトで開催します。今号では、開催への足取りを一部構成でお伝えします。

## 1 対談

芸術監督就任予定者 稲葉俊郎 × 学長 中山ダイスケ

## 全体性を取り戻す芸術祭「山のかたち、命のかたち」

山形ビエンナーレ開催まで一年を切った10月末、芸術監督就任予定者 稲葉俊郎さんと本学学長 中山ダイスケの対談を行い、開催に向けての想いを語ってもらいました。聞き手・取材…速藤牧人（地域連携推進課）

### 出会は猪熊弦一郎現代美術館 開館27周年トークイベント

——山形ビエンナーレ2020は開催に向けて本格的に始動しました。初めに中山学長に、今回のコンセプトと芸術監督就任予定者の紹介をお願いします。

中山…山形ビエンナーレはこれまで、「震災後の東北において、アートとデザインで何ができるか?」というコンセプトで、山をテーマに三部作として開催してきました。今回は、それに続く新たなシリーズの始まりとして「もつと市民が体験できること」をテーマに考えていましたが、ちょうど香川県丸亀市で開催された「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館開

### 稲葉俊郎 いなばとろう



1979年熊本生まれ。医師。東京大学医学部附属病院 循環器内科 助教。心臓カテーテル治療や先天性心疾患を専門とし、伝統医療、補完代替医療、民間医療も広く修める。芸術活動など詳細は下記を参照。(撮影) <https://www.toshiroinaba.com/about-me>

館27周年イベント」(2018年11月)のトークイベントで稲葉俊郎さんとともに登壇した際、東京大学附属病院の医師という視点から、アートは新しい医療である、というお考えを聴き、稲葉さんをお迎えして「身体に効く、体験型」のビエンナーレが作りたいと考えました。

——オファーを受けて稲葉さんはいかがでしたか。

稲葉…猪熊弦一郎さんの「美術館は心の病院」という言葉が鍵になったのかもしれない。僕は心臓専門の医者ですが、体はよくなっても患者さん自身は健康や幸せと感じていないことがあります。体のリペアだけでは医師の自己満足ではないかと。現代は心の栄養が不足していて、人々の心は飢餓状態なのかもしれない。心の飢えを満たすのは文化・芸術の役割ではないでしょうか。芸術が生まれる初期衝動に「自分のため」が先にあり、「自分」が拡張されたときに他者、社会、地球へと広がる。それは医療と同じだと考えました。もちろん、芸術には経済的側面もありますが。中山…作家が「自分のため」につくったものが「他者」の共感を呼び、鑑賞行動や売買ビジネスを通して社会と繋がるということですね。

稲葉…そうですね。自分の美意識や感受性を抜きにして、他者の顔色を伺って売れるもの



稲葉俊郎さん(左)と中山ダイスケ学長。現役医師を芸術監督に迎える芸術祭が今まさに産声を上げた(撮影)



「山形と芸工大展」で昨年のピエンナーレを振り返る中山学長と稲葉さん(撮影J)

「芸術」とはもつと身近なもの  
街へ下りて市民とつくる芸術祭

—— 今回のコンセプトは「もつと市民とつくる」ことだそうすね。どのようにつくっていくますか？

中山… アートとかデザインというところ、一般の社会からちよつとはみ出たところにあるものと思われがちです。でも本来は、人の生活のそばにあつていいものです。一般の人にも季節を愛でるとか、美味しいものを美しく彩るという日常があります。「それもアートなんですよ」とみんなが生活の中のアート行為を再認識できるピエンナーレにしたいですね。そう思って現役の医師である稲葉さんに思い切つて声を掛けたところ、「ちよつど新しい本を書くところで、考えていたこととびつたりだからやりたい」と。そこで、僕も「たぶん日本で初めて、現役のお医者さんを芸術監督にお迎えした全く新しい展覧会を作ります」と大学内に宣言しました。

稲葉… 前回の著書『いのちを呼びさすもの』では「個人」の全体性、そして今は「場」の全体性を取り戻すことを書いています。「場」とは医療であつたり祭りであつたりします。中山… ですから、今回は私たち二人の出会いから始まつたというよりも、稲葉さんがその

「場」として山形を選んでくださったとも言えます。山に護られた山形には歴史と風土があり、美しい四季と実りがあり、温泉という大地のエネルギーと水、木々の息吹や澄んだ気に包まれています。その上に人の営みがあり、さらにそこに交響楽団や芸術大学もあるのですが、それらが立体的にうまく結びついていない。それを結びつけるのがピエンナーレだと思えます。

稲葉… いいコンテンツがあつても水路でつながっていないことが解決すべき課題ですね。山形には、理屈抜きに心身がほぐれる温泉があつて、美味しい食事もあり、いのちが安らぐ場だと思ふんですよ。

中山… 古代ギリシアの療養の起源と言われる場所には「温泉」があつたんですね。稲葉… そうですね。世界遺産でもあるエピダオロス考古遺跡は、紀元前4世紀に古代ギリシアで建造された1万5000席の古代劇場ですが、ただの劇場ではなく巨大な医療施設でもあります。そこには温泉や上質な眠りを提供する神殿の跡地もあります。人間が生命の場に還り全体性を取り戻すのが眠りです。

中山… 「眠り」についても、ぜひピエンナーレの要素に入りたいですね。稲葉… 日本の神殿は何かと言えば、お寺や神社ですが、それがばらばらになると全体性が失われます。それらをつなぐのが祭りです。

祭りでは神様のもと普段の役割から降りて、みんなが平等の立場へと帰つていました。中山… ピエンナーレは全体をつなげる祭りなのです。そういう思想のもと、まるで温泉に入るようにアートに触れ、いい音楽を聴く、体の中にいい物を入れる。マッサージやヨガ、眠りのように「感じる」という要素も取り入れたいですね。普段どれだけ笑っているか、いい音を聞いているか、食べ物や味わっているかなど、生きるという全体性の中にアートの体験がいかに重要であるかに気づいていただければ…。

稲葉… 芸術の体験は目的ではなく、生活、生命、自然の全体性や深さに目を開きつつかけだと思ふんですね。山や土や日や水や空気。そうしたものが関係性を持つて成立しているからこそ、生きていけると思うのです。

芸術活動でも常に  
「部分と全体」を意識する

中山… 面白いのは、稲葉さんは普段は心臓のカテーテル治療という非常にミクロな世界を扱うお医者さんですが、どうして「全体性を取り戻す」という思想に至つたのですか。

稲葉… 事の流れてミクロ世界を専門にしましたが、本当は人間全体、人生全体に関わりたいていと思って医療の世界に入りました。ミクロ

の世界を突き詰めると、いかに部分と全体が巧妙にやり取りをして、ミクロとマクロを行き来しながら生命が成立しているかを痛感します。芸術でも同じことで、ミクロとマクロの相互作用で全体性が成立しています。生命の世界はどこを切つても入れ子状になっていて、部分の中にもまた全体性が現れます。中山… マクロ視点で見ると、どこにある病院もみんな同じですよ。もつと地域によつて

いろんなフォーマットがあつていいと思ひます。山形の病院は山形らしくていい訳ですし、湖のほとりにある病院はこんな感じとか…。稲葉… 地球の視点で見ると人間を癒す場所は温泉なんですよ。温泉は地球内部のエネルギーが外部に噴出した場所です。古代からそこに人々が集うのは自然の摂理で、そこに湯治場が生まれました。人間は勝手な都合でビルを建てますが、自然は完璧な調和とバランス



山形を代表する湯治場 肘折温泉で毎年開催される芸術イベント「ひじおりの灯」。足湯には観光客が足を止め、集い語り合う(撮影N)

スのなかで立ち現れています。もう一度、この山形で全体性を見つめ直して、新しい全体性を取り戻したいです。人間がいじつていい場所かどうかは、自然全体のバランスを考え続けたいと分かりませんから。

## 全体性を阻む、人間の中の「壁」を取り払ってみる

——最後に稲葉さんの資料にあった人間の中の「壁」とはどのようなものでしょうか。稲葉…偏見とか思い込みのことです。頭の中でつくられた壁が全体性を見えなくしてしまいがちですが、生命は直観的に本質を理解しているはずで、私たちの分断の壁を取り払う道具の一つがアートだと思います。

中山…確かに、アートやデザインはそういう壁を取り払おうとする行為ですね。アーティストが壁に気づき、対峙することから制作が始まります。新しい山形ビエンナーレは、市民と芸工大がともにつくる一つの作品になればと思っていますが、そこで新たな壁を見つけたら向き合うことで、参加者のマインドが更新されていくといいですね。

—— 一般に芸術祭というとな難解なイメージが付きまといますが、山形ビエンナーレはそれらとは一線を画すものになろうかと…。中山…確かに、一般的にアートイベントの

コンセプトは難解ですが、稲葉さんはとてもわかりやすい言葉で芸術を翻訳してくれる芸術監督です。安心して普段は触れたことのない音楽やアートを楽しみ、自身の生活とナチュラルに接続させることができる、そんな芸術祭になると思います。山形には奥深い文化を土台に新しい芸術を生み出せる土壌があることを示したい。そろそろ全く新しいアー



卒業生の作品の前に語る二人。来年はどんなビエンナーレを見せてくれるのだろうか(撮影J)

トとの付き合い方を提案したいです。今回のテーマは「山のかたち、命のかたち」です。山(場所)について考えることは、この街のあり方や我々の命について考えることと一致します。

稲葉…体と心で感じる芸術祭にしたいですね。中山…究極の山形らしい芸術祭をつくっていきます。大学がきっかけとなって、街の人がつくり上げる芸術祭に発展させられればと思います。

稲葉…山形の宣伝でよく使われるキーワードを一度忘れて、まっさらな子どもの目で山形をもう一度読み解きたいですね。

中山…そうですね。たとえアート界の方々に「これのどこが芸術祭なの?」と怒られても、山形の人は「これこそが芸術祭だ」と胸を張れる、そんな芸術祭をつくりましょう!

——ありがとうございます。

山形ビエンナーレに向けて、今後、大学はさまざまな情報を発信してまいります。会員の皆様、ご支援のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

### ご協賛のお願い

地域における産業や観光による地域活性化、東北の復興支援等に取り組まれている後援会企業の皆様は、社会貢献活動の一環として本事業にご協賛を賜りたく、1月末に要項等を送付させていただきます。

## 2 キックオフトーク 文化財修復家 宮本晶朗 × 芸術学部長 三瀬夏之介 文化財修復家と芸術家の連携で生まれた 「藻が湖伝説」企画

今回のビエンナーレのなかで、特に地域色の強い「藻が湖伝説」企画。

11月15日、立案した二人が学内外に向けキックオフトークを行いました。

取材…遠藤牧人(地域連携推進課)



この企画のキュレーター宮本晶朗さん(上)と三瀬夏之介教授。二人の企画は昨年に続き2回目(撮影J)

## 文化財修復家と芸術家の協働で 地域のためにできること

夕暮れの教室に、授業の終わった学生や、学外からビエンナーレに参加を予定しているアーティストや研究者らが集まり、二人のキュレーター、宮本晶朗さん(文化財修復家)、三瀬夏之介教授(芸術学部長 日本画家)のキックオフトークが始まりました。

はじめに、三瀬教授がこれまでの経緯を説明しました。

「山形ビエンナーレは震災のあと、東北の復興を考えて始められ、今回で4回目になります。本学は公設民営の大学ですから、地域の

ためになる制作や研究が求められ、デザイン工学部では、建物のリノベーションや商品開発などを行っています。では、個から生まれる表現が中心の芸術学部では何をするか、と考えたとき、文化財修復家と芸術家が組んで、ビエンナーレを作り上げるとこの企画に至りました。本学文化財保存修復学科とその大学院を巣立った文化財修復家 宮本さんとの共同企画は、山形ビエンナーレ2018で展示した『現代山形考』に続いて2回目です。」

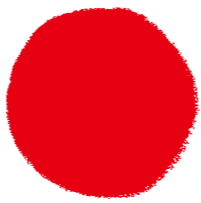
続いて、宮本さんが、ビジュアルで前回の展示を振り返りながら、語りました。

「2018年の展示では、県内各地から集めた文化財とそれに感化された作家の作品を並列に展示しました。例えば、山形には『ムカ

サリ絵馬』という風習があります。独身のまま亡くなったわが子があの世で結婚する様子を描きます。その風習から作家の感性で作品が制作され、絵馬といっしょに展示しました。」

「会場では、実際の修復現場を再現し、その場で修復作業も行いました。倒壊寸前のお堂から救出して修復した文化財には、戻す場所がありません。どういふものをどこまで修復するか、も問題となりました。」

文化財修復家と芸術家が協働した芸工大ならではのこの企画、宮本さんと三瀬教授は、2018年の終了後まもなく、2020年のビエンナーレのために「藻が湖(もがうみ)伝説」をテーマにした展示の企画に入ったそ



# そして、彼女はマタギになった…

連載 山形の元気！卒業生の仕事②— 蛭原紘子さん「マタギ／小国町役場」

芸工大には山形の地に深く根ざした学科がいくつかあります。歴史遺産学科もその一つ。今回は、熊本県から縁あって本学美術科日本画コースに入学し、更なるご縁でマタギの世界に興味を抱き、歴史遺産学科のクマ狩り見学に参加、ついにはマタギになった卒業生、蛭原紘子さんの「仕事」をご紹介します。小国町の山中へ向かいました。

取材：遠藤牧人（地域連携推進課）



マタギ文化を語るために蛭原さんが選んだ場所は、山中の能舞台。こういう場所だと話しやすいのだという（撮影O）

芸工大には山形の地に深く根ざした学科がいくつかあります。

歴史遺産学科もその一つ。今回は、熊本県から縁あって

本学美術科日本画コースに入学し、更なるご縁で

マタギの世界に興味を抱き、歴史遺産学科のクマ狩り見学に参加、

ついにはマタギになった卒業生、蛭原紘子さんの

「仕事」をご紹介します。小国町の山中へ向かいました。

な湖があり、それを奈良時代の僧侶・行基（668〜749）が基点山という場所で開削（794〜864）がさらに開削し、湖を干上（えんじ）がらせた、という伝説です。付随して、今でも地名として残る『東根』と『西根』は湖の東岸と西岸でその間を船が行き来していた、この『藻が湖』がのちに『最上』という地名になった、ということも語られます。こうした伝説は山梨県の甲府盆地など各地、遠くはネパールなどにもありますが、歴史上の人物の名前が二人も上がっているのは、山形の大きな特徴です。」

近年は河川の決壊が大きな問題になっていきますが、この時代には頑強な堤防などありません。――伝説とは、遠い昔の話ではあっても現代の生活に確実に結びついていることを、実感させられます。さて、今後、この企画はどのように進んで



奈良時代に行基、平安時代に円仁が開削したと伝えられる、最上川の基点付近

うです。4月からは2ヶ月に1回のペースで打合せや事前調査を重ねています。

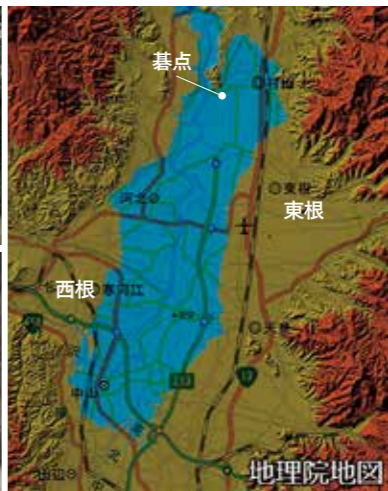
## 現代にもつながる「藻が湖伝説」ビエンナーレではどう表現？

では、「藻が湖伝説」とはどのようなものでしょうか。宮本さんは語ります。

「山形盆地にはかつて『藻が湖』という大き

いくのでしょうか。三瀬教授にまとめてもらいました。「本学には制作系と研究系の学科があり、その両方が生きる企画にしていきたいです。今ある山形を一度白紙に戻して、想像力を膨らませ、近代化の問題や水害などについても考えながら、進めていきましょう。」

さまざまな分野の専門家や学生が関わる「藻の湖伝説」企画にご期待ください。



「藻が湖」のイメージ地図。山形盆地の広範囲が湖だったと想像できる（右）。最上川沿いだったと思われる場所に今も残る「波除け白山堂」（上）と「波除地蔵堂」（下）

## 動物好きが高じ絵画の世界へ動物本来の姿を描きたい！

蛭原紘子さんは熊本県の出身です。育った家は市街地にありました。小さい頃から動物が好きで、高等学校は美術科で、よく動物の絵を描いていたそうです。絵画の道に進もうと決めた彼女は、東京で美大受験の準備を始めました。

そこで、現在につながる最初の出会いはありました。大学説明会で本学日本画コースの岡村圭三郎教授（当時）に感化され、2005年、彼女は芸工大に入学することになったのです。本人も無意識のうちに、マタギの世界への最初の扉が開かれました。

芸工大に入学した蛭原さんは、夢中で動物をスケッチしたそうです。しかし、それは長くは続きませんでした。「山形とは言え、市街地の暮らして動

物の野生本来の姿をスケッチする機会はありません。動物園に通っていましたが、飼育され緊張感のない動物たちを見て、これは違う…と感じるようになりました。2年生の時でした。同時に、私は動物を観察する手段として絵を描くのが楽しいのであって、作品を作りたいわけではないことに気がつきました。」

そんな蛭原さんを次に突き動かしたのは、歴史遺産学科で開講されている田口洋美教授の授業でした。教授はマタギ文化の専門家、こういう分野の授業が開講され、他学科にも開放されているのが、芸工大の特徴です。彼女は思い切って研究室を訪ねました。

## 田口研究室の扉を開くと目指す世界がそこにあった

田口研究室の扉を開いた蛭原さん、夢中で自分の思いを2時間も語ったそ



山形県のベストを着用して山を歩く蛭原さん。山と動物にひたむきに向き合う姿勢が伝わってくる(撮影O)

うです。結果、教授からその後の道を聞く一言が…。  
 「そんなに興味があるなら、歴史遺産学科の学生とじっくりクマ狩りに行くか？」  
 その時の喜びを、蛭原さんは「もう迷いはなかったですよ！」と振り返ります。  
 実際にクマ狩りを見学したのは、3年生の春でした。それから大学院を卒業するまでの5年間、彼女は小国町に通い詰めることになりました。  
 「マタギの山歩きは登山とはぜんぜん違います。『メタテ』という見晴らしのいい場所でクマを見つけるのですが、1キロも先の黒い点を見て、マタギは『いた！』と言います。でも、私には黒い点なんていっぱいあって、どれがクマなのかわかりません。歩き方も山の見方も、次元が違うと思いました。」  
 マタギの技と人柄に魅了された蛭原さんは、マタギの世界にどんどん足を踏み入れていきました。

ここで、ちょっと気になったことが…。日本画コースの学生だった蛭原さんは、卒業制作はどうしたのかと…。大学院に進むには、それなりの作品が必要だったのでは？マタギとの両立は難しかったのでは？私の問いに、蛭原さんの答えはこうでした。  
 「私は、卒業制作を早めにきちんと終わらせ、その後は動物と人との関係を題材に進学のための論文を書きました。大変でしたが、結果、大学院の歴史文化専攻に進むことができました。」  
 これも芸工大からできる進路変更だと言えるでしょう。

**彼女の熱意と努力がマタギの伝統を揺り動かした**

2012年3月、蛭原さんは本学の大学院修士課程歴史文化専攻を修了し、小国町役場職員として働く傍ら、山と関わる生活に入ります。11月中旬から5月上旬まで、週末の都合がつく日に仲間とともに山に入るそうです。

仲間内の結束が強く、強い信頼関係で結ばれているマタギの世界は、誰もが入れるわけではなく、特に女性には伝統的な「女人禁制」の壁があります。それを乗り越えた彼女には、さぞ苦勞があったのでは？



「メタテ」でクマを探すマタギ。山中の無数の黒点の中から瞬時にクマを見分けるのは、山に生きるプロの技



雪深い谷川を遡っていくと、ごく細いつり橋が現れた。まるで自然の懐深く入っていくための関所のような

山に集まったマタギ仲間。命がけの仕事だけに、その仲間意識は非常に強い。蛭原さんもその一員となった

「簡単ではありませんでした。でも、私の場合、狩猟免許取得前にひたすら猟に同行した3年間があり、そこである程度の信頼関係と、女性がいてもクマが獲れるという実績を作ることができました。当時、先進的な考えの山親方が『これからの時代、マタギも変化していかなければ…』と私を迎え入れてくれました。この親方なくして今の私はありません。ただ、命がけの世界では体力的に男女平等は難しいと感じています。今はまだ吸収することが多いですが、将来的には体力に依存しない部分できちんと自分なりの役割を果たせるようになりたいです。」  
 それはどんな役割なのでしょう？  
 「山中でクマを見つける、場所の説明をする、といった技術はもちろんですが、その他対外的な部分で、マタギ自ら自分たちの世界を語るのには難しいのが現状です。しかし、そこには伝えるべき文化があります。山ノ神に対する敬意とそれを表す儀礼、命の扱い方…それらをしっかりと伝承していく媒体に、私はなりたいです。」  
 そう、この取材もその一環なのです。

さて、マタギの置かれている現状は、どのようなのでしょうか。  
 「毛皮の需要がほとんどない今、マタギは生業としては成り立ちません。銃の所持や狩猟登録に毎年費用がかかります。実態が知られていない世界ですが、東京でトークイベントを開くと若い世代が参加してくれ、とても興味を持って小国で行うイベントにも来てくれます。現代のマタギは本業を別を持っていて、私は役場職員です。今は担当部署が違いますが、私が役場にいることで、マタギがおかれる状況を役場がより把握できるようになればと考えています。」  
 最後に、大学と後輩たちへのメッセージを…。  
 「歴史遺産学科のある芸工大の日本画コースに進んで本当に良かったです。大学でも地域でも、いい出会いがあった今の私があります。後輩たちには、アウトプットにばかり一生懸命になるのではなく、インプットを大切にしてください。」  
 大学はスクランブル交差点、それを大学院まで進み7年間かけてじっくり渡りきった蛭原さんには、本当にいい出会いがあったのです。今は生業にならなくとも、蛭原さんの「仕事」は近い将来、きっと脚光を浴びることでしょう。